



1991 年 (平成 3 年)
9 月号 (No. 556)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- フィリモアの『印度測量局記録集成』
—その第 5 巻について—
- 雁部貞夫 (1)
 - 平成 3 年度各担当理事の運営方針・
新委員の構成について (2)..... (2)
 - 海外の山..... (3)
 - 「ティルマンの心」
日本山岳会蔵の地図類について (3)..... (3)
 - 討報・NHK 矢内カメラマン..... (4)
 - 追悼・二上純一君..... (5)
 - 「海外登山募金」助成登山隊報告..... (5)
 - ヒラリー卿から礼状..... (6)
 - 東西南北..... (6)
 - 「焼却爐の中から」神谷さんの話
に添えて一言..... (10)
 - 図書紹介
「カメラ片手に地球を駆けろ」片
雲往来 PART III..... (12)
 - 自然保護随想..... (13)
 - 書籍・雑誌受入れ報告、図書室だ
より..... (14)
 - 報告
「第 1 回世界野生医学会議」に出
席して、ほか..... (16)
 - 会務報告
7 月定例理事会、合同募金常任委
員会、山研・ナムチャ合同募金
募状況、ルーム日誌、タンポチ
僧院再建協力募金者ご芳名、新入
会員(復活)、住所・住居表示変
更お知らせ..... (18)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテロップ電話

3234 六六五九

フィリモアの『印度測量局記録集成』 —その第五巻について—

雁部 貞夫

大ていのヒマラヤの研究書や書目の解説には、R・フィリモア編のこの大著について、全五巻から成ると記してある。かつて、私たちが編んだ深田久弥著『ヒマラヤの高峰』(一九七三、白水社「決定版・三巻」)にも、葉師義美氏の浩瀚な書目『ヒマラヤ文献目録』(一九八四、白水社)にもそう記されている。

今、後者によって、その大要を引用してみる。

Phillimore, R. H. (Collect & Coml.) 1945-62 Historical Records of the Survey of India (5 Vols.) Dehra Dun, Survey of

India. 29.3×20.
Vol. 1: 18th Century. (1945) 418 P.
Vol. 2: 1800-1815 (1950) 478 P.
Vol. 3: 1815-1830 (1954) 534 P.
Vol. 4: 1830-1843 (1958) 493 P.
Vol. 5: 1844-1861, Andrew

Waugh (1962)
と記してある。

葉師氏がこの本についての、解説文を省略したのは、恐らく、初版刊行時に比し、所収の書目点数が飛躍的に増加してしまったためだろうが、やはり簡単な内容の説明が欲しいところだ。また、第五巻について、ページ数その他図版の点数について触れるところがないのは、現物を見ずして推察される。また、この巻の発行年次は、一九六二年ではなく、私の知るところでは、一九六〇年である。さて、この第五巻はなかなか曲物で、刊行されたのは確かだが、日本人でこれを実際に入手した人は一人として存在していない、と思われる。少なくとも一九九〇年頃までは。以下、第五巻の刊行事情をめぐって私の知り得たことを少し記しておく。

この巻だけが、その刊行時に広く世に流布しなかったのは、政治的、軍事的事情によるためである。当時、中国との国境紛争に神経を尖らせていたインド政府が、この本を外に出すことを禁じたというのが真相だったようだ。うらにはうらがある。イギリスのライブラリー数ヶ所に、この第五巻は三冊だけ収められたが、それを閲覧する

のは、現物を見ずして推察される。また、この巻の発行年次は、一九六二年ではなく、私の知るところでは、一九六〇年である。さて、この第五巻はなかなか曲物で、刊行されたのは確かだが、日本人でこれを実際に入手した人は一人として存在していない、と思われる。少なくとも一九九〇年頃までは。以下、第五巻の刊行事情をめぐって私の知り得たことを少し記しておく。

なお、この書物(一〜四巻セット)の近年の価格はひと昔前の六倍ほどにはね上がり、約三十万円。第五巻が加われば、四十万円近くする高峯の花となりそう。

ナムチャ登山
山研改築
合同募金に協力を!

平成三年度各担当理事の

運営方針・新委員の構成について(2)

(13) 青年部(村井)

高所登山の経験者を養成することを目的とした三ヶ年計画の第二年度にあたる本年度は相馬勉委員を隊長に中国ムスタグ・アタ峰に派遣、一九九二年度は、山本宗彦委員を隊長に、チベットの予定している。

そのためには、青年部の委員を充実させることが必要であり、各大学の若手OBに対し、積極的に参加を呼びかけ、活性化をはかっていきたい。

定例集会は毎月第一木曜日を予定、連休を利用した五月の銀岳、六月の谷川、富士山、二月の八ヶ岳等の合宿、十月の小川山岩登り集会の他、六月、十月には海外登山報告会、十二月の忘年・講演会、三月の納会を計画している。

(委員) 村井龍一、鈴木郭之、橋本清

金子浩、早坂敬二郎、山下六郎、宇田川芳伸、小笠原岩雄、絹川祥夫、松本正城、山本宗彦、相馬勉、北村真、大谷亮、熊崎和宏、大貫敏史、山本篤、大西宏、佐藤正倫、松原尚之、片岡泰彦、西村哲、高市豊義

(14) 学生部・指導委員会(村井)

学生部は例年通りの行事を行うが、今年度は、各大学の監督、OBにも協力を求め、学生部の集会への参加者を増やすことによる青年部への底辺の拡大をはかりたい。

なお、学生部の年中行事は、六月の小川山岩登り集会、九月の沢登り講習会、十月のハードフリー講習会、十一月のマラソン大会、二月の八ヶ岳氷雪合宿(青年部と合同)を計画している。

(委員) 村井龍一、早坂敬二郎、宇田川芳伸、山本宗彦、大谷亮、熊崎和宏、大貫敏史、山本篤、大西宏、佐藤正倫、松原尚之

(15) 女性懇談会(穴田)

従来の婦人懇談会は、どちらかといえば、首都圏在住の女性会員を対象にした集りであったが、この度名称を女性懇談会に変更するのを機に、全国の女性会員を対象に考え、十月十二日に白山山麓八森町で全国集会を行う他、ニュースレターの発行、ミニ懇談会を開催する等して、女性会員の意向を会に反映していくよう努力したい。

(委員) 穴田雪江、宮沢美渚子※、小倉重子、熊谷とも子、山口節子、早川

瑠璃子、岡部みち子、松永康子、羽賀育子、黒沢通子、高本信子、門井照子、佐藤知恵子、田中恵子、矢作郁子、大塚玲子

(16) 遭難対策委員会(片岡)

日山協等、他の遭難対策委員会とも緊密な連絡をとりながら、当会として果すべき役割を認識すると共に、特に最近問題となっている中高年登山者の遭難予防の問題など前向きに取り組んでいきたい。

(委員) 片岡康彦、橋本清、入沢郁夫、松永敏郎、中川武、関口令安、小林政志、柳沢昭夫、村井龍一、山本宗彦、松本正城

(17) 自然保護委員会(大森弘)

六月に新発田で行われた全国集会において、本会の自然保護に対する活動理念を討議し、さらに新委員を迎えて組織の強化をはかった。

本年度は、本会の自然保護活動の今後の進むべき方向を検討し、委員会のあり方を固めたいと考えている。

行事としては、全国集会の他、例年通り、自然観察山行、環境保全を要する山の現地視察、講演会、シンポジウム等を計画している。

(委員) 大森弘一郎、池田剛※、渡辺正臣、藤井健、松丸秀夫、越智英夫、伊藤敏、中保、山口俊輔、国見利夫、高遠宏、小倉厚、本多勝一、斉藤桂

梨羽時春、武田満子、遠藤光男、木名瀬亘、松本恒廣、羽賀克己、小西奎二、沢井政信、近藤緑、関塚貞亨、松沢節夫、麦倉啓、岡島成行、渡部温子、横山隆、田中茂夫、市川義輝、黒沢秀雄、滑志田隆、渡辺徹、奥野道治、山口悠紀子、小林光、中村武雄、宮原巍、小野有五、田部井淳子、山瀬一裕、梅本知栄子、上善峰男、穴田雪江

(18) 海外連絡委員会(神崎)

登山界も国際化がすすみ、今年から来年にかけては、HATJの国際シンポジウム、スポーツクライミングワールドカップ、UIAA総会などが、日本で開催される予定であり、海外から多くの著名な登山家が来日される。本委員会としても、これら行事を積極的に支援し、海外の登山界との交流を深めていきたい。

(委員) 神崎忠男、吉沢一郎、近藤等、村山雅美、早川瑠璃子、鈴木郭之、宮下啓三、三辺夏雄、田村俊介、河野長梶正彦、伊丹紹泰、高本信子、磯野剛太、吉田宏、岡島成行、佐藤千恵子、藤井正彦、大谷亮、武居台三、藤田礼子、佐藤皆子、伊藤主税、牧野良三、桜井義雄、大島三枝、ソーン・ドーシュ

(19) 医療委員会(関口)

登山医学研究会と委員は重複しているので表裏一体となって、特に高所登

山を対象として研究を行うが、一方本会の構成メンバーからみて中高年登山者の健康管理、トレーニング方法等についても重点をおいて採り上げていきたい。

〔委員〕 関口令安、大森薫雄(※)、辰沼廣吉、中島道郎、河村栄二、斎藤惇生、山本良三、黒石恒、滝越之、浜口欣一、金子宏、川久保芳彦、田中壮佑、野島照雄、滝和美、堀井昌子、松林公蔵、住吉仙也、長尾悌夫

20 フィルム・ビデオ委員会(山口)

新しい記録の蒐集、保存フィルムのビデオ化の推進、会員へのフィルム、ビデオの貸出しPR、撮影についてのノウハウ提供を中心に、機会あることに会員へのサービス提供を心がけてきたい。

〔委員〕 山口俊輔、羽田栄治(※)、内田耕作、渡辺正臣、織田沢美知子、川嶋新太郎、上北和夫、薬科光雄、南川金一、小山睦子、袴田通孝、戸谷忍、森宏子、梅本知栄子

日本山岳会所蔵の

地図類について(3)

児 玉 茂

平地を除けば地名や標高数値は少なく、また資料がないはずの山地にも空白部がありません。そのため「本圖ハ精確ナル材量ニ據テ調製セシモノニア

海外の山

ティルマンの心

一九七七年十一月、一九八〇年ほどのヨット「アン・ヴァン(前進)号」がブラジルのリオ・デ・ジャネイロを出航したまま、行方を絶った。

帰らなかった六人の中に、ハロルド・ウィリアム・ティルマンがいた。七十九歳だった。南米大陸最南端、ホーン岬と南極半島(パームランド)の間にある南シエトランド諸島のスミス島を目標しての帆走だったが、嵐に巻き込まれ海に吞まれた、と推測された。スミス島のマウント・フォースター(二二八七呎)に登ることが、この老探検家の目的だった。

ティルマンはアフリカ、ヒマラヤに数多く足を残した登山家だったが、一九五〇年代以降はヨットで海洋に出、辺境の山々に登るというスタイルの冒険にもっぱら打ち込んだ。登山では一九三〇年のキリマンジャロをはじめ、シプトンとパーティーを組むことが多く、共に多くの著書を残している。そのシプトンも同じ一九七七年三月七十歳の生涯を終えた。

ニュージーランドの登山家、ゲリー・ポールは、十四年前、ティルマン一行に誘われ、フォースター峰と一緒に登る手筈になっていた。はじめりオからヨットに乗り込む予定だったが、仲間一人と補給地のフォークランド諸島に先着して「アン・ヴァン号」を待ったのである。

「約束の日に彼が現れなくても、我々はそんなに心配しなかった。ティルマンのタフネスやサバイバルの能力

を信じていたし、実際、過去にも予定に遅れながらちゃんと生還したことが何度もあったからである」

当時ゲールはそう手記に書いたが、ティルマンの来ることを信じて、二人は結局翌年二月まで空しく待ち続けた。

八十歳の誕生日を前に、南大西洋に消えたティルマンの果敢な挑戦心は、今になっても冒険的な生き方に憧れる者たちの心をとらえて放さない。

一九九〇年、三十七歳になったポールは、友人のロブ・ホール(二九)と共に「七大陸最高峰を七か月で登る」計画に挑戦、十二月十日、南極のビンソンマシフ(四八九七呎)に立ってそれをやり遂げた。

二人は五月十日、エベレストに登ったのを手始めに、アコンカグア、マキンリー、キリマンジャロ、エリブルース、コジオスコとたて続けに登り、あっさり目的を達したのである。「七大陸最高峰」の山の定義に他の説があることは、既にこのコラムで書いた通りだが、これほどスピーディーに完結するとは、驚くべき時代になったものである。

ティルマンが、オデルとナンダ・デヴィに初登頂したのは一九三六年のことであり、エベレストのノース・コルに達したのは一九三八年だった。以後カラコルム、ネパール・ヒマラヤ全域へと踏査範囲を広げるが、一九五五年、ヨット「ミスターフ号」でパタゴニアに行つてからは、もっぱらヨットを利用しての登山というユニークな行動を創造していった。

十三年前の、ティルマンとの「始まる前に終わった冒険」を、ポールは別な形で展開していった、と言えるかもしれない。

(江本嘉伸)

ラス故二十万分之一帝國圖成ルノ上ハ
廃止スヘキモノナリ」と後に注記され
て、止むを得ざる手段による「仮のもの」と断わっています。しかし「帝國圖」が日本全土を覆い終わるのは昭和の初めで、それまではこの輯製図が三十年間も命脈を保っておりました。

北海道の図幅(明治二十四、二十六
年発行)は中でも極端なもので、實際
に利用した人がいたかどうかわかりま
せんが、中央部にあるはずのヌタクカ

計報

ナムチャバルWNHK取 材班の矢内カメラマン

雲仙岳で殉職

去る六月三日の雲仙・普賢岳の火砕
流遭難事故は、記憶に新らしいところ
であるが、この三十七人目の犠牲者、
NHK報道局映像センターのカメラマ
ン矢内万喜男氏⁽³¹⁾が、本会と関係の
あったことを知る人は少ないので、こ
こに故人のご冥福を祈りながら、謹ん
でお知らせする次第である。

同氏は都立大学ワンダーフォーゲル
部出身の山好きのカメラマンで、NH
Kにおいても「北極圏シリーズ」など
数々の実績を残されていたが、中でも
湾岸戦争の際は、地上戦の前から現地
入りし、最前線で活躍されていた。と

ムウシユペ(大雪山)がありません。
同時期に実測を終えていた北海道庁の
成果ではなく、松浦武四郎の『東西蝦
夷山川地理取調圖』や北海道開拓使の
『三角術測量北海道之圖』に準拠した
ためでしょう。『日本山嶽志』をまとめ
た高頭式の輯製図にたいする評価は
次の通りです。「此地図は山岳地に至り
ては山岳の位置さへ知る能はざる程に
して用をなさず」

日本山岳会には「占守嶋」図幅一枚

くに二月下旬にクウエートが解放され
てからは、未だ戦火のおさまらぬクウ
エート市内にいち早く入って取材にあ
たり、市内の混乱ぶりや、油井火災の
模様など、迫力ある映像を撮影したこ
とで知られていた。

これら数々の実績を踏えて、中東か
ら帰国されるや、直ちにナムチャバル
ワ取材チームのカメラマンとして選抜
され、ナムチャバルワ登山隊事務局に
も、元気な姿を見せていた。

運命の六月三日午後四時過ぎの火砕
流発生の一時間前に現場に到着して配
置についたばかりに、この事故に巻き
込まれたわけで、運命のいたずらとし
かいようがない。

その後大火傷を負い重体となった氏
は、長崎県大村市にある国立長崎中央
病院で手当てを受けられていたが、入

を除く一四九枚が揃っています。
二十万分之一「帝國図」は五万分之一地
形図からの編集図で、現在市販されて
いる二十万分之一「地勢図」の前身に当
たります。百段間隔の等高線と「ぼか
し」を併用した四色刷の地図で図郭の
範囲は輯製図と同じ経度一度、緯度四
〇分です。

「帝國図」にもいくつかのタイプが
あります。一色刷の「假製版」には「本
圖ハ正式製版ニ先立ち應急ニ発行セル

院から二十三日後の六月二十五日夜
半、本人の必死の頑張り、関係者の
一日も早い快復への願いも空しく、呼
吸不全のため逝去されました。

これからという時の事故で、本人の
無念さも大きかったと思われるし、残
されたご遺族の心中を察すると慰めの
言葉もありません。謹んで哀悼の意を
表します。

通夜(六月二十九日)、葬儀・告別
式(六月三十日)は、東京千駄ヶ谷の
千日谷会堂において、矢内家・NHK
合同葬の形でとり行われましたが、本
会からもナムチャバルワ登山隊の名で
生花を供え関係者が参列して弔意を表
しました。

(遺族) 千田川崎市多摩区菅田堤二
一―三三三 プロスタクラン三〇二号
矢内真由美(妻)

モノナリ」と備考があります。「長崎」
図幅などの軍事施設地域では、等高線
を消し去った「ぼかし」のみの地図が
あります。また「帝國図」の原版は昭
和二十年の空襲で失われてしまったた
め「地勢図」が発行されるまでの間、
写真製版によるぼやけた一色刷の「假
製版二十万分之一」や、「ぼかし」のな
い三色刷の「暫定版二十万分之一地勢
図」が地理調査所から発行されていま
す。

外地の場合も本国と同様の経過を辿
り、五万分之一実測図が完成後に「帝國
図」に相当する編集図が作製されてい
ます。所蔵する台湾二十万分之一図は、
三角測量前の段階で陸地測量部によっ
て作製された「台湾假製二十万分之一」
で、明治二十八年の台湾占領時に測量
された地形図をもとにしています。四
色刷で「ぼかし」を併用した「帝國図」
と比較すると、墨一色のうえ位置や標
高も不正確、山岳地帯は未測量のため
等高線は破線で間隔が広く描かれてい
ます。

所蔵の朝鮮二十万分之一図は、総督府
臨時土地調査局による「會寧」図幅で
すが、国境地域のため市販されたもの
は五万分之一の「交通図」と同様に情報
量が制限された地図です。ちなみに等
高線と標高の入った地図は「秘扱」に
なっています。

五十万分一図では、北海道庁が二十万分一「実測切図」から作製した「北海道地形図」(明治三十年発行)があります。仕様は「実測切図」と同様で三色刷、百段間隔の等高線と詳細な地名を載せた一枚地図(十枚切り分け)です。

さらに小縮尺の百万分一となりますと国内向けよりも、世界地図の一部としての意味があります。

地質図についても同様で、明治三十年代には地質調査の成果を一枚の日本地図に纏めることができるようになりました。地質調査所は「豫察地形図」

追悼

チヨモランマに消えし

二上純一君を悼む

宇都木慎一

憧れと夢のはざまに立つ峰を登りし君は東壁に消ゆ
待つ人の多くがありてなお君は憧れの果てに翔んでゆくのか
ロンブクの氷河の奥の高き峰に君が残せし確かなる足跡
チヨモランマの頂にたちて君は今誰に語るのか果せし夢を
帰るべき君は帰らじあじさいの花咲くころは悲しみのとき

一九九一年七月六日

の完成後編纂に着手し、百万分一「大日本帝国地形全図」を明治三十年に発行しています。三色刷で、二百段間隔の等高線と詳細な地名を載せています。この「地形全図」を基図とした「大日本帝国地質図」は一八九七年にペテルブルグで開催された第七回万国地質学会に出品されています。日本山岳会には一枚図(十五枚切り分け)の「地形全図」と「地質図」のうち九州、四国、中国の部分三枚が所蔵されています。

陸地測量部の百万分一図は、明治二十七年に日清戦争の作戦用にと、鉄道

(二上純一氏略歴)

- ・一九五一年 一九五〇〜一九九一 関西大学山岳部入部
- ・一九七五年 知床半島単独縦走
- ・一九七四年 シリア・カンリ、バルトロ・カンリ登頂
- ・一九八一年 日本山岳会(関西支部)入会
- ・ムスターグ・アタ登頂
- ・一九八二年 岩手支部に移籍
- ・一九八九年 キナバル登頂
- ・一九九〇年 キリマンジャロ登頂
- ・一九九一年五月二十七日、チヨモランマ登頂、帰路行方不明
- ・会員番号八九二七番、享年三十九歳

△ △ △

道路、電信線、地名が正確であることを要求されて朝鮮半島、山東半島、遼東半島周辺の「假製東亜輿地圖」が十面製作されました。これに引き続き、明治二十九年から昭和六年の間に「東亜輿地圖」として日本を含め、カムチャッカ、沿海州、中国本部、モンゴル、中央アジア、パミールまでも含む広大地域について作製されています。四色刷で図郭の範囲は経度五度、緯度二度三〇分、地形は薄墨色の「ぼかし」で表現され山名は平仮名を用いています。精度はともかく、この地図作製に使用した資料は膨大なものと考えられます。一沿海州の地名にはロシア文字を添えている所があります。日本については地質調査所の「地形全図」をベースに使っているようです。この地図に描かれているのは遙かに遠い大陸への夢なのかもしれません。

日本山岳会には沿海州、内モンゴル中国本部と日本を含む一〇三枚が所蔵されています。

*

この小文をまとめるに当り、『測量地図百年史(日本測量協会)』と『古地図研究「地図」地学雑誌』の各号を参照いたしました。

また、久松将四郎：『地質調査のための測量の歴史』地学雑誌65・2・3と、高頭式：『千島群島の山嶽研究に

就て』山岳1・2を引用しました。

*

以上に紹介致しました所蔵地図の大部分(三二〇〇枚)は一括して寄贈されたものですが、いつ、どのような経緯で日本山岳会に収まったのかは不明です。保存状態は非常に良く、地図を展開した状態か、重ねて二つ折りにした状態で広いスペースに長い時間置かれていたことを推定させます。量も種類も良く揃っており、個人のコレクションの域を越えています。

紹介した中で「北海道実測切図」と台湾、朝鮮の実測図、アメリカ製の五万分一地形図は、元会長の武田久吉氏旧所蔵の地図です。武田氏の地図は折目の入った使用されたものですが、総数は六四三枚、丁寧に整理、分類されて特製の箱に納められています。

(一九九一年 四月)

「海外登山基金」

助成登山隊報告

明治大学チヨモランマ峰
遠征隊 隊長 平野真市
遠征隊帰国のご挨拶

日本山岳会のご後援および海外登山基金のご援助を頂きました明治大学

チョモランマ峰遠征隊は、六月末の最後の隊員をもって全員無事帰国致しました。

北京、カトマンズよりチベット入りした隊は最奥の部落のカルタよりキヤ

タンボチエ僧院再建募金

ヒラリー卿からの礼状

ヒラリー卿からタンボチエ僧院再建募金に対するお礼状(七月二日付)が関係五団体(山田二郎会長宛)に届きました。

内容は以下のとおり。

「お手紙ありがとうございます。
タンボチエ僧院の再建に対して、日本の登山家並びにトレッカーの努力により六〇〇万円を集めていただいたことに大変喜んであります。これはかなりの金額であって、財政的に再建プロジェクトの成否を左右する位です。シェルパタンボチエ僧院再建委員会は彼ら独自に感謝の意を表するものと思いますし、この日本の援助が彼らに対して、いかに大きな意味を持つかということも理解しております。」

ラバンを始め、登山隊に馴れていないポーターや、途中の降雪に悩まされながら東面のカルタチューを辿り、四月十四日カンシュン氷河上にベースキャンプを設営、同十七日より上部へ向けて偵察およびルート作業を開始しました。

しかしルートにとりましたカンシュンリッジは岩と氷の状態がきわめて悪く落石、氷のブロックの崩壊が続発し、非常な危険を感じたため、五月六日、第一キャンプの上部六四〇〇呎を最高



焼却爐の中から

神谷量平
(神谷恭遺族)

私は会員ではありませんが、父がある戦前の一時期、評議員だの会報の担当幹事だのを歴任したので、そのころの細かい資料がつい最近まで相当に保管されていました。と過去形で書きま

到達点として撤退することに決しました。

絶大なるご協力と応援をして下さいました皆様にはご期待に添うことが出来ず誠に申し訳ありませんでした。幸い若い連中は意気軒昂であります。この貴重な体験を生かし、新たな挑戦へ向けて再出発したいと考えております。今後共よろしくご指導の程お願い申し上げ、お礼および帰国のご挨拶とさせていただきます。

すのは母の死後、旧宅を処分しなければならなくなり、膨大な父の遺品を大部分焼却したからです。山岳会へ寄贈した「神谷文庫」以外の山の本、会報などの一部は私が保管しましたが、物故会員の書簡、原稿、山岳会事務に関する伝票など、関係者から見れば惜しいと思われそうなものもかなりありましたが、残念ながら処分させて頂きました。

ただし、その中から私流儀で撰別して若干は残してありますが、平素起居を共にしたわけではないので、当然あってしかるべきものが、いつの間にか随分散逸してしまいました。例えば日本山岳会創立六〇年記念の展覧会に出品した、大島亮吉さんの原稿などは、その謂れ因縁を付記した木暮先生の前

稿は残っているのに、肝腎の本体がなくなっています。

父はそれらの歴史的な人々の原稿を丹念に保存していたのですが、現在残っているのはほんの僅かです。いまそれらをさらに区分けして整理中なので正確なことは言えませんが、土曜会関係、木暮先生碑前祭関係など、多分誰も保存していないだろうと思われるものが相当にあります。何しろ山岳会も木暮先生の家も焼けたのに、私の家は焼けなかった上に、父は何でもとっておく人だったので、いっそのこと家へ引き取っておけばよかったと言った、父はよく笑ったものでした。

忘れもしない敗戦の年の昭和二十年の正月、私は図書室からレスリー・ステイブンの『ザ・ブレイグラウンド・オブ・ヨーロッパ』だとか、ウインスロープ・ヤングの『オン・ハイヒルズ』など数冊を借り出して半年近くも返さなかったのに、選りに選って焼け落ちる寸前に返すことになったのは、多分父がせつせと市ヶ谷台町の木暮先生の家から、膨大なヒマラヤ文献をリヤカーで搬んでいた律儀性に触発されたものだったと思います。

すべては烏有に帰しました。あの琴平町の不二屋ビルにあった図書室は万巻の山岳書に埋もれて薄暗く、三田幸夫さんが国民服にゲートル姿で詰めて

いて私の返本を受理されましたが、何月何日だったか忘れしました。とにかく火はそれから確か一週間とはたなかったと思いますから、何とも残念な思い出です。まして東洋一というか、二つとない有数な蔵書が今も目に残っています。

それにひきかえ、磯子の家は今日まで無疵で、実に下らないものまで残っています。下らなくても何となく手離し難いものです。父が死んだ今ではもうすべて雑件に過ぎません。小さい火にたちまち消え去るものをみつめながら、少しはお役に立ちそうなものの中から、土曜会のノート一冊、ご参考に供します。そのほかのものもまたいつか持参します。

(一九九一・六・二)

●神谷さんの話に

添えて一言

先日の土曜会に神谷量平氏が出席し、「父(神谷恭氏)の遺品の中からこんなものが見付かったよ」といって一冊のノートを披露された。今から三十年ほど昔の「土曜会出席者ノート」である。これを見ると当時の土曜会の様子が彷彿としてくる。これをそのまま、埋もれさせてしまうのは誠に残念と思いい、こういう研究に最も熱心な内藤勇会員に「内容を会報に紹介してくれま

せんか」とお願いしたほどである。たとえばこんな事実がある。

毎年、新年度最初の土曜会には、署名のあとには必ず自分の生年月日と年齢が書いてある。会員名簿には、何故かこの重大事項が欠けている。以前から私は、せめて生年月日ぐらいはいてほしいと思っていたが、三十年も前に同志がいたとは驚いた。次に一言つけ加える。

土曜会は気楽にやって来て山の雑談と楽しむ集りで、資格や制限は一切無い。クラブライフを満喫出来る日本山岳会唯一の場所である。(河野幾雄)

霧の徳本峠越え

坂倉登喜子

島々谷を歩き始めた頃から雨となりむらさき色の桐の花がしつとりと濡れた緑の中に優しく咲き、ニセアカシアの白い花が小雨の径に匂っていた。

滑りそうな岩に注意しながら登りにかかると、いつもの斜面にミヤマカタバミが濡れてしぼんだ姿で見られた。

幾度か橋を渡り緑のしずくがしたたり落ちるような樹林帯の小径は何時に變らず素晴らしく、霧雨に烟った幻想的な風情はまた趣のある美しさだった。時折澄んだコマドリの声が響き、雨

のため増水した流れの音が大きく聞こえて、棧道の滑る橋を渡る時は、若し落ちたら大変と皆緊張気味であった。

何時もならのんびり休みながら夕方までに小屋へ着けばと歩く道も、雨では休まず岩魚止先代のお墓に花を捧げて、割合早く小屋に着き濡れた衣類を乾した。そして岩魚と山菜料理の夕食前に、翌日の晴天を祈って乾杯!!

翌朝はお祈りがきいたのか早朝から青空が広がり皆大喜びで元気に出発。朝の陽光が緑の樹々に輝いて、なんとすがすがしい朝だろうと、ニリンソウの群落に迎えられて快調に歩き始めた。この日私達十名のパーティがトッポに歩くので、後から登ってくる人のため石や枯木をのけ、ゴミを拾って清掃に協力したが、峠道では飴の包紙二つだけしか落ちてなくとも綺麗だった。

やがてサンカヨウの小径と私達が名づけたお花畑でカメラタイムをとり、ゆるい登りが終わった橋の手前で小休止、角の尖った横木の橋がとても歩き難くて、バランスよく渡らないと危険だ。

最後の水場付近は桂の芽吹きの子ア色が緑色に溶け合って、霧に烟る情景は水墨画の世界だった。美味しい清水でハチミツレモン水を作って一息入れ、最後の登りにかかる。この急坂カー

ブを皆で数えながら、最後の二十二回を確認し元気に徳本峠着、峠の小屋の小松さんに迎えられてビールで乾杯、峠で半分雪ひだを見せた穂高を仰いでいると、村木副会長一行が到着され、去年ブータンで会ったJAC富山支部の青年に呼びかけられて驚いた。

峠から下山途中明神が仰げる麓の右側斜面でシャクナゲの大群落を見つけて、梓川合流点に達し、小梨の花咲く明神で一休みの後西糸屋へ。翌日六月二日四十五回ウ祭は残念ながら雨だったが、私達は傘もささず穂高に響けとばかり、高らかに大合唱して碑前で解散した。

ザースフェーを訪ねて

一六一五 富田健一

この七月二日から、かねがねスイスの友人との約束で彼の家に厄介になり、十八日に帰りました。その間ロッチェンタールを歩いたり、一人ザースフェーに入り、ミシャベル山群を間近く眺め久しぶりに万年雪の上を、ザクザク歩いて楽しんできました。その折、Brianian Hütteを遠望しながら、アイゼン、スキー持参の旅でなかったの、訪ねることができませんでした。今思うと惜しい気がします。ネパール

の方に詳しいあなたからみると、こうした小屋はヒマラヤの麓のコテージ級でしょうね。この小屋のことは、先年大阪で差し上げた『スイス山岳会小屋集』※に入っていると思います。あの本は、戦前長くパリに生活（日銀支店）をされていた藤島敏男氏から、氏の写されたアルプスの写真と共に頂いたものです。

ザースフェーは日本のツアーが入っていませんので静かで楽しい所。入るまで溪谷は、黒部の廊下を思わせる所が多く、是非もう一度行きたいです。

(七月三十一日付 松田氏宛)

※CLUBHÜTTE DES S.A.C. 第3巻1987年号は貴重な資料なので、図書室に寄贈しました。なお、この最新版については『山』五四二号参照下さい。(松田)

多摩源流への憧れ

遠藤泰孝

ほぼ十年前の晩秋、大菩薩峠から小菅へ降ったとき、天然林の紅葉と澄み渡った紺碧の美しさのコントラストに東京都水源林の見事さを心ゆくまで堪能した。この想い出から、かつて明治維新の開化で荒れ果てた山を、明治四十年代初め、時の東京市長尾崎行雄が

経営復旧すべきであるとして先頭に立たれて以来、今日まで宮々として水道局が管理し、水源かん養の機能を果たしている多摩川の最深奥部を見たいものとの衝動に駆られた。

五月一日、塩山駅前です約してあったタクシーに乗り、六時半出発。裂石の手前で旧道に入ったら番所跡の揭示が見えた。往時の青梅街道の関所という。道々、息子にあれこれ説明。柳沢峠までのヘアピンは結構長く感じられた。道中、運転手さんから丹波までの紅葉の美しいところなどを聞く。一の瀬林道とオイラン淵から丹波までが見どころと教えられる。因みに、塩山から丹波までのタクシー代およそ九千円位とか。イワナなどの養殖も盛んの由。

落合から細い道となり、犬切峠を越える。そこから一の瀬集落までは舗装悪く北面の下り道とて暗かった。一の瀬集落から三の瀬に至る民宿など、庭先に丁度桜の花が咲き乱れていた。学校は適齢期の子供がいなくなってしまうため休校の由。本当はこの高原の民宿に泊りたかった。一三五〇坪程の地点で運転手さんが、ここが登り口、と教えてくれる。別れを告げ、そこでパンの朝食。

最初は大径木のブナなどの緩やかな登りに流れの水音を聞く。暫くの間、

まだ新芽の展開しない広葉樹林帯でスナップ写真を撮る。後で気付いたことだが、登り初めから稜線近くまで小鳥の巣箱が数多く見られた。ウグイスの鳴き声がしきり、一五〇〇〜一六〇〇坪辺りからカラマツの芽が膨らんでいる。枝にはサルオガセもからまつている。トウヒがそよそよとしている。モミ類もあちこち。水源かん養林の名に恥じないこけむす岩の間を流れる清水。

まだかまだかと登る先にトイレらしき小屋が見えたら、カラマツとモミに囲まれた笠取小屋だった。曇天のためもあって物寂しげなたたずまい。人気はないが、新旧小屋とも火の気が残っていた。大菩薩方面が見られる。記念スナップを撮った後、一寸歩いたら広々とした笹原が眼前に開け、国師、甲武信が広がる。水干神社へはカラマツの間をはば平ら道が縫っている。恐らく水源林巡視道であろう。そろそろ近いなと思ったら、岩の上に「水神社」と彫ってある。それだけである。祠を連想していたのに、あにはからんや。水滴は殆んど見られなかった。勤めの関係やら足の便の悪さもあって今日まで来られなかった宿願遂に成就。かつて多摩川水系のみが飲用水であった笠取山頂への直登はきつかった。山

桜の蕾固く、休み休み喘ぎながら登る。息子は早い。山頂にはアツマシヤクナゲが蕾をつけて群生し、ツガが我が物顔であった。風強く寒い。上から見えていた雁峠へ至る道の途中で迷ってしまった。笹が密生し、その中に道が消えてしまっている。後で地図でわかったことだが、かつては使われていたものを、近頃は歩く人がいないらしい。明るい広い笹原に戻り、見当をつけて降る。風衝地だけに寒い。小屋脇で握り飯をほうばった後、広瀬へ向けて降った。

海別岳

流水の見える山(1)

田中三郎

海別岳は斜里岳とともに、知床連山の南端をなす山である。斜里から国道三三四号を宇登呂へ向うと、なだらかなコニデ型の山体が、あたかも独立峰のように望まれる。標高は一四一九・四坪にすぎないが、オホーツク海にじかに接しているだけに、風の強いことと知られている。

一等三角点研究会の会長で京都在住の坂井久光氏、苫小牧の松田幸一氏とともに一九八九年九月、斜里町のウナベツ自然休養林管理センターを訪れたのは、海別岳の登山ルートについて最

新情報を入手するためであった。

海別岳の一般的な登路は二つある。糠真布川沿いの林道から五の沢を登る夏のコースは登頂の架橋がいくつか破損崩壊して、現在はほとんど利用されていないとのことだった。

冬のスキー登山では海別川沿いに入って西北西尾根に取り付くのだが、そのコースからは、この夏、地元の人が単独で登頂に成功した由であった。いずれにしろ海別岳は、北海道に来たついでに気軽に登れるような山ではないことがよくわかった。

のちに北海道アルパインサービスの川越皓充君に、西北西尾根からスキーで登頂したときの話を聞いたので、私のような非力の者でも、川越君に同行してもらい、雪洞を用いて時間的に余裕のあるプランを立てれば登れるのではないかという希望を抱いた。さらにその後川越君から、オホーツク海に流水が来る時期の好天をつかまえば雪中登山は容易であるという連絡を受けた。それを裏づけるように、札幌の平野明氏からも流水の来る時期なら私でも登山可能というアドバイスをいただいた。

海別岳に心ひかれたのには理由がある。一等三角点研究会の顧問である今西錦司先生が一九八六年四月十二日、京都ホテルで催された千五百山記念祝

賀会の席上、未踏の山に言及され、「北海道では海別岳(一四一九)が残っている。これは一度失敗しているのでもう一度試みたいのはやまやまだが、いまの体力では、はたしてこれを許すかどうか……この辺りでそろそろ思い切りつけどころ(千五百山のしおり)と述べられた。そのとき先生は八十四歳であった。私は現在七十九歳なので、登れるうちに海別岳登頂をぜひ実現したいと考えたのである。

幸い、川越君が息子の竹也君とともに同行してくれることになり、また休養村管理センター支配人の斎藤公道氏も参加してくださることになった。

一九九一年三月十八日、管理センターに集合すると、いくつかの新情報が出ていた。

まず三月三日、海別川右岸の尾根を登った札幌山岳会の三十七名が深い新雪のため森林限界で引き返したとのことであった。次いで十日、東京の女性登山家三人が札幌隊のトレールをたどり、晴天に恵まれて北峰に到達したが、強風のため本峰は断念したという。また数日前には道内の登山家一人が好天を利用して本峰を踏んだとのことであった。私は年来の願いがかなえられるという確信を持った。

△ △ △
—— 続く ——

土曜会へのお誘い

神谷恭平

私は土曜会(昔の別名神谷バー)の創始者の一人、故恭の次男です。私も余り出席率のよい方ではありませんが、どうも人数が少なく淋しいのです。現在は長老を中心に、清談、閑話、軽飲を楽しんでいます。若い会員が多数参加してマンネリを打破して下さい。ばよいと思います。

クラブライフの楽しさに幅を持たそうではありませんか。

山の民謡、高山植物、山の絵、写真等テーマをきめて集まるのも、ひとつの活性化でしょう。

とにかくお顔を出して下さい。会長さんはじめ役員の方もご出席お願いいたします。

大佐渡の山

越後支部親睦山行

小林碧郎

咲き群れて一人静ぞ雲のなか
白根葵雨の尾の上に牧寂びて
雲ふかく森青蛙響るなり
筒鳥や港へくだる齒朶のみち
金北山北東風に晴るる波の上

(短歌)

雲海

大橋克也

雲海は動かぬ如く動きぬ島かと紛う
峯を消しつつ

動かぬと見えし雲海も脚下にて泡立つ
如く息づきており

ドンと打つ太鼓の響き伝わればこの雲
海も動き始むか

ブロード・ピーク登頂

この度の私達「東京農業大学創立百周年ブロード・ピーク登山隊一九九一」にたいしまして多大のご支援、ご協力ありがとうございました。おかげさまで、七月十二日午前十一時二十分、早坂隊長以下五人の全登攀隊員が登頂に成功することができました。これも偏に皆様のご協力のたまものと、心より感謝申し上げます。
(七月二十三日付、スカルドにて、総隊長加藤和夫、登攀隊長早坂敬二郎)

△ △ △

平成三年度「海外登山募金」 助成登山計画募集

海外登山基金委員会

平成二年度は、海外登山基金による助成の初年度であり、第一回の募集が、プレモンスーン期の登山隊には、間に合わなかったという経緯もあり、かつ年度のローテーションを軌道に乗せるため、十二月末を以て締め切る第二回の募集も行い、計六隊、六〇〇万円の助成を行いました。平成三年度からは年一回の募集となります。左記の通り募集を行いますのでふるってご応募下さい。

記

(一)対象 平成四年二月一日～平成五年一月末日に出発する登山隊。会員の推薦があれば隊の規模の大、小は問いません。

(二)申込方法 所定の様式(本会事務所に請求下さい)に記入し、登山計画書(十五部)を添付して申請して下さい。

(三)申請締切 平成三年十二月末日

(四)審査ならびに交付の時期 平成四年一月中旬に審査を行い、二月の理事会に

けて決定し、二月中旬～三月末迄に交付する。

なお、交付金額は約三五〇万円(平成三年度予算計上額)。



図書 紹介

カメラ片手に 地球を駆ける

風見武秀著

著者・風見武秀さんは言うまでもなく日本山岳会員であり、また山岳写真の第一人者である。やがて古稀を迎えようとしている今もなお、現役として地球を駆けめぐり、華麗なる風景を求める旅を続けている。

昭和の初めから本格的に山岳写真を撮りはじめおよそ六十余年。昭和三十三年ネパール・ヒマラヤを振りだしにヨーロッパ・アルプス、アラスカ、カ

ナダ、アンデス、シルクロード、チベットの七地区、さらに南極、いずれも世界の名だたる山岳地域へと、山岳とその自然にカメラを向けて訪ねた国は、七十二カ国に及ぶという。

本書は、各国の美しい山岳自然をカメラに収めたときの感激をはじめ、現地で出会った人々とのうろわしい交流、そして育まれた友情など三十数年にわたる著者の貴重な体験、やエピソードなどを綴ったユニークな読み物。

「私の取材はほとんどフリープラン。だから撮影のポイントを決めたら、あとは根気と努力、決断と行動、そして旺盛な写欲しかない。すると信じがたいほど美しい山岳風景を見ることができたり、そこに住む人々との交流が生れて、私の心をなごませてくれる」と語る。著者の創作意欲と人柄を垣間みせる言葉だ。

世界のいずれの山岳風景をこよなく愛しているのがよく分かるが、中でもヨーロッパ・アルプスに寄せる情熱はひとしおのようにみえる「撮りたいものは撮る」ということを信条に、世界の山岳写真を求めている旅はさらに続くことであろう。

写真集はこれまでに数多くまとめたきたが、このような読みものは著者にとって初体験だと言う。さすが写真家、自然と人の心をうまく切りとりながら

豊富な話題で読者を楽しませてくれる。

平成二年十二月初版 山と溪谷社刊
A5判 二六〇頁 定価二〇〇〇円

(羽田栄治)

片雲往来PARTⅢ(第二部) 語らいの山々

上村幹雄著

本会越後支部の副支部長上村幹雄氏の「片雲往来」がまたまた出版された。PARTⅢ(第二部)と銘打っての四冊目である。相変らずの大冊、すべてが手作りだから驚く。

内容は前(第一部)の「阿賀北の山々」(本誌五四三号図書紹介参照のこと)に対して(第二部)は「阿賀南の山々」である。これで阿賀南北の山々のほとんどが網羅されたことになる。本書の構成も姉妹誌だから当然だが、第一部とはほぼ同じで「新潟日帰りの山」として県内、県外と分けられ、泊りの山」としても県内、県外と分けられていて、やはり前著と同じく膨大な山の数である。主に川内山群の紹介だが、守門、末丈、高津倉、飯士、黒姫といった上中越の名の通った山名もみられるほか、県外では北海道、奥秩父、南アルプス、奈良の山、北アルプスにまでも足を伸しているようだが、しかし、

とくに県内については地元の精通者が書いたものだけにまことに信頼に足る参考資料と言えるだろう。

随所に短歌、俳句、詩ありマンガ、△山のパンセVありで筆者のチャメツケ、ユーモアさがあふれる本でもある。支部長の佐藤一栄氏はこれを天衣無縫、自由闊達と評しているようだが、まことに当を得ている。とにかく多才な筆者である。方言もまた面白い。

越後では怠けものことを「のめしこき」という。筆者はのめしこきの故「山」に行つて来るとその感想は次の山に行く前に必ず書こうと」枷をはめて実行しようと努力してきたという。その成果が七二四頁に及ぶこの膨大な『片雲往来』であり、驚くべき大冊である。「のめしこき」ではとても出来る仕事ではない。

一九九一年五月 B5版 七二四頁
頒価二五〇〇円(送料別) 申込先
951新潟市関屋金衛町1-16上村幹雄
☎0251-26615086

(小倉 厚)

南極大陸横断

国際探検隊

一九九〇年南極大陸横断
国際探検隊日本事務局刊

イギリスのシャクルトンは一九〇九

年に南緯八八度二三分に達し、極点まであと一五六キまで迫った。その後、アムンセン、スコットが極点に到達したのは周知のとおりである。シャクルトンは極点に到達できなかったが、壮大な計画を立てた。すなわち、一九一四年から一七七年に行なわれたエンデュランス号による大陸横断計画である。船が氷に押しつぶされて計画は完遂できなかったが、全員無事帰還した。南極大陸横断の夢が実現するのは、それから四十年後の一九五八年でフックスとヒラリーによって成された。これは今世紀最大の冒険と評され全行程雪上車による走破である。その後イギリスのフィーンズ隊がスノーモービルで0度線に沿って横断した。

三回目は昨年(一九九〇年)六ヶ国六人の国際隊により六〇四〇キを七ヶ月間、犬橇で横断した。困難な山岳地帯の南極半島を含む最も長いルートでアムンセン以来二度目の犬橇で極点に到達したあと、ミールヌイ基地にゴールした。

国際隊は、南極条約の凍結を旗印に世界の目を南極に向けさせた。国境のない唯一の大陸を自然の宝庫のまま手つかずの形で残すべく世界にアピールした。本書は国際隊が出発前に公刊した南極啓蒙の冊子で、横断成功後邦訳されたものである。各国のトップが巻

頭にメッセージを寄せている。(ソ連は間に合わず未掲)美しいカラー写真を配し、第一部は南極大陸の地理、気象、生物、探検史がわかりやすく解説されている。第二部は国際隊の紹介で、計画、隊員、犬橇チーム、装備など隊の概要が理解できる。巻末には「南極を考える」と題した小中学生の作文コンクールの入選作品がまとめられている。本書により南極の現状と展望が把握でき、言語、文化、習慣の異なる六人のチームによる横断成功の意義の大きさが伝わってくる。日本から参加した最年少の舟津圭三氏の手記の刊行が待たれる。

一九九〇年三月 一九九〇年南極大陸横断探検隊日本事務局発行 八二頁 頒価一〇〇〇円(送料三六〇円) 問い合せ先 (株)オフィス・オクムラ ☎〇三三三四八四二六五三 (宇都木慎一)

ミッテレギー稜初踏破 七〇年と

“Japaner-Führern auf der Spur”の反響

岡沢祐吉会員の著書『山案内人の手帳より』の地元スイスでの反響については、会報『山』五一八号に紹介したが、その節、著者によってドイツ語版

の刊行が計画されており、地元スイスで大いに期待されている旨、書いた記憶があるが、そのドイツ語版が、この度漸く刊行され、地元スイスで話題になっている。

著者は、この仕事のため、本会役員等も辞退し、専念されていたが、モス・グリーンのハードカバーの本書を見ると、その努力の後がうかがわれる。

今年五月十六日付のスイスの新聞、ノイエ・チェルヒャー・ツァイトゥング紙には一頁をやって、『Jah turnt sich der Berg...』(突然山が簞え立つ!!)というタイトルのもと、七十年前、行動意欲に燃えた日本人の横有恒氏によってアイガー・ミッテレギー稜が初踏破されたこと、そして横氏は、この山行にたいへん感謝し、ミッテレギー山稜上に小屋を作るために一〇、〇〇〇フランを寄進し、これにこたえて集った六〇〇〇フランと合わせて、収容人員十四名の避難小屋が完成したと。そしてこのルートの安全を確保するために、固定綱が設置されたこと。

これに対し一部の批評家から、異議が唱えられたが、初登頂者で唯一の生存者である、サムエル・ブラヴァンド氏は、この問題は、実際にこれを使用した体験者だけが、その意義を理解できるものだと反論している。

同氏は今年五月十八日で九十三歳の

誕生日を迎えた。ガイド、教師、ベルン州の閣僚としての仕事までされた、この老人は、謙虚に、当時の模様を語ってくれたが、登山を確りと、文化的行為であると述べている。

そしてこの新聞記事の最後は、岡沢氏の著書を次のように紹介し、横有恒氏の業績を讃えている。

× × ×

岡沢氏は数年前、スイスで案内人の手帳にのっている日本人の記録を調査し、一九八七年末に、その調査結果をまとめた本を、日本語で東京において出版された。そしてそれから三、四年たつて、著書自身の手による本文一三頁、写真四十五頁からなるドイツ語版が提供された。即ち、一九二〇年代から三〇年代にわたる日本人アルピニスト二十余人のアルプス登山にかかわる業績が記され、さらにツェルマット、ハスリタール、グリンデルワルトの山案内人手帳に載っている、日本人の書いたものも添えられている。そこには一九二一年九月十日に、横有恒氏によってなされた、アイガー・東山稜の初登攀のことも載っている。このことは、フリッツ・アマターの案内人手帳では一九二一年九月二十一日の日付で、次のように記されている。(訳は岡沢氏)

「アイガーの東尾根!!、之れ五十年來登高する者を以て任ずる者の試みて

(自然保護随想)

ゴミと日本人

駅のプラットホームで、電車のくるのを待つ間に煙草をすっている人を見てみると、オーバーな言い方をすれば一〇〇%の人が電車に乗る直前にそのすっていた煙草を足もとに落し靴でふみつけるか、または指で線路に向ってはじき飛ばしている。

車を運転して信号待ちをしている時、前に止っている乗用車の運転者側のドアが突然に開き、灰皿にいっぱい溜った煙草のすいがらを道路に捨てている。

トラックはトラックで飲み終えたジュースの空缶を道路脇の塀や生け垣の上に立てている。この様な光景を今迄に幾度みてきたことか。

四十〜五十人は乗れる乗合船で海釣りに出掛ければ、昼飯時になるとビールの空缶や弁当の空箱が船の周囲の海に捨てられ、しばらくの間はそれらがプカプカと海面をただよい、にぎやかな事である。

もちろん釣の専門誌や新聞には、海はきれいにしましよう、ゴミは捨てないでくださいと盛んに書いているが、現場の船長がゴミの注意をするのをいまだかつて聞いた事がない。

人が大勢歩く山路にゴミ箱を設置すると、アツと言う間にその箱はゴミであふれ、入り切れなくなったゴミがその周囲にうず高く積み重なってしまうので、今ではか

えってゴミ箱は置かない方が山がきれいになっているなどの意見がだされる始末である。

日本人のゴミに対する無関心と言うか自然環境をきれいに保とうとする気持ちの欠如は、ひどいものであると私はいつも嘆いている。

皆さんの中には、この世の中そんなにひどい人ばかりではないと思われるかもしれないが、少しでも悪い人がいれば世の中は汚れが目立つのである。

今年の正月はシンガポールで迎えた。確かにきれいな街である。日本も早くきれいな状態にしたいのなら、シンガポール式にゴミを捨てたら高額の罰金をとれば数年できれいになるかもしれない。

しかしこれもきつと反対をする人がいるだろう。各人のゴミに対する意識を高めて結果を得ようなどときれい事を言っていたら、何十年たってもこの目的は達成されないだろう。

昨年三島で開かれた自然保護全国集会の折に、小学校の先生をしていた方から、自然の大切さ、自然保護の教育は小学生の時から教えないければ駄目なのだとの発言があったが、この意見が全ての根本なのかもしれない。

少なくとも日本山岳会が計画・関係する海外登山も含めた山行計画では、さすが日本山岳会の人達だ、歩いたあとにはゴミひとつ落ちていないと外部の人達から言われる様になる事が、まず我々がやらなければならない自然保護活動の第一歩だと思うが、さて皆さんにはどれだけ自信があるだろうか。

(横山 隆)

能わざりし処。神州国の一書生、アマター及び他のストイリ、ブラウヴァンドの三案内と試みてこれを為し遂ぐ。事

小なりと雖も、日本国の名をアイガーと共に残したりと思う時、若き血の燃ゆるを禁ずるを得ず。此書読み給う君、

希くはグリンデルワルトのそのアイガーの東尾根を仰ぎ給へ」 横有恒

(松田雄一)

書籍・雑誌 受入れ報告 1991年 4月

著者	書名/雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈/購入別
Selzer V. & Lockerby R.	Mountaineering & Mountain Club Serials	A5/180pp	Scarecrow	1990	発行者寄贈
日本山岳会越後支部	越後山岳 創刊号～第5号 復刻版	A5/103～144pp	同支部	1989	発行者寄贈

書籍・雑誌 受入れ報告 1991年 5月

著者	書名/雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈/購入別
仙台一高山の会	CHOLPANGLIK NUZTAGE報告書	B5変型/94pp	同山の会	1990	発行者寄贈
本山岳会富山支部	ブータン王国自然調査報告書	B5/109pp	同支部	1991	発行者寄贈
三斗小屋温泉誌刊行委員会	三斗小屋温泉誌	A5/326pp	同刊行委員会	1989	発行者寄贈
クライミングジャーナル編集部	日本の岩場 (上)	B6/253pp	白山書房	1991	発行者寄贈
田中三郎	六十歳からの日本三百名山	B6/214pp	東京新聞出版局	1991	発行者寄贈
上村幹雄	片雲往来 Ⅱ-2 阿賀南の山々	B5/724pp	上村幹雄	1991	発行者寄贈
京都大学ヒマラヤ研究会編	ヒマラヤ学誌 第2号	B5/227p	同研究会	1991	発行者寄贈
佐藤 康	独りぼっちの鳥海山	B6/196pp	無明舎出版	1991	発行者寄贈
永田芳男	山溪フィールドブックス1 春の野草	B6変型/367pp	山と溪谷社	1991	発行者寄贈
浜口哲一・叶内拓哉	山溪フィールドブックス4 野鳥	B6変型/383pp	山と溪谷社	1991	発行者寄贈
堀田弘司	山への挑戦 登山用具は語る	縦書版/220pp	岩波書店	1990 2nd	著者寄贈
横 有恒	横 有恒全集I 憧憬	B6/391pp	五月書房	1991	発行者寄贈

書籍・雑誌 受入れ報告 1991年 6月

著者	書名/雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈/購入別
ジョー・シンブソン	死のクレバス	A5/280pp	岩波書店	1991	発行者寄贈
東京農業大学山岳会	NANGPARBAT 1989	B5変型/126pp	同山岳会	1991	発行者寄贈
日本山岳会東海支部	名古屋からの山なみ	A5/275pp	中日新聞本社	1991	著者寄贈
日本山岳会東海支部	東海支部報1～45+支部通信 合本	B5/774pp	同支部	1991	発行者寄贈
逸見征勝	遠い麓走路	A5変型/206pp	逸見征勝	1991	著者寄贈
Servei general d'informacio	Catàleg del Mapes 1990	23×165 mm/52pp	SGI	1990	発行者寄贈
Servei general d'informacio	KARAKORAM Graphic index of Map	地図7枚+A4/18pp	SGI	1991	発行者寄贈

書籍・雑誌 受入れ報告 1991年 7月

著者	書名/雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈/購入別
エルウィン・クニッピン	クニッピンの明治日本回想記	B6/325pp	玄同社	1991	発行者寄贈
近藤辰郎・今野岳志 他	アルプス大展望	B5変型写真集/160pp	山と溪谷社	1991	発行者寄贈
横 有恒	横 有恒全集Ⅱ 情熱	B6/375pp	五月書房	1991	発行者寄贈
小嶋 尚	自然景観の読み方3 山を読む	B6/147pp	岩波書店	1991	発行者寄贈
大場秀幸	自然景観の読み方4 森を読む	B6/161pp	岩波書店	1991	発行者寄贈
大森弘一郎	空からパノラマ【北アルプス】	B5変型写真集/95pp	山と溪谷社	1991	発行者寄贈
アジア経済研究所編	発展途上地域地図目録第一巻アジア地域	A4/326pp	アジア経済出版会	1990	購入
岩と雪編集部編	山岳年鑑'91	B5/222pp	山と溪谷社	1991	発行者寄贈
山本朋三郎	南アルプス 山の歴史	B5/174pp	井川山岳会	1991	著者寄贈
クライミングジャーナル編集部	日本の岩場 (下)	B6/249pp	白山書房	1991	発行者寄贈
	山と高原地図 1～116	地図+ガイド	昭文社	1991	発行者寄贈

図書室だより

(1)

「図書室だより」コーナーを約二十年ぶりに再開します。会員の皆様に図書室をもっと良く利用していただくために「受入れ報告」のみではない図書情報に掲載してゆく予定であります。

当面は管理体制の交替期ですので、作業の進捗状況等をお知らせします。

▼本年五月以降の「書籍・雑誌 受入れ報告」は版型とページを加えました。

▼今年度より現行の二万五千分の一地形図を全部揃えることとし、専用の地図整理棚を購入しました。四千四百二十二枚が完全に揃うのは予算の関係で二年後になります。

▼次回は現在寄贈、交換、購入中の受け入れ雑誌、定期刊行物のリストを掲載する予定です。

▼八月中旬より書籍の一冊毎のワープロ入力を開始しました。一日も早く全書籍の目録を作るべく作業を続けております。(図書管理委員会)

「第一回世界野生医学会議」に出席して

中島道郎

表記の国際医学学会が、去る七月十四日から十九日まで、カナダのウィスラーというリゾート地で開催され、それに出席してきましたので報告します。というのは、「野生医学」なる学問分野は、その国際会議が第一回目であることからお分かりのとおり、まだまだ真新しいものであり、こういう学問分野があるということを皆さんに知って頂きたい、日本でもこういう学問分野が発達してきて欲しい、と思うからであります。

「野生医学」は、英語の Wilderness Medicine の訳語です。日本語として未熟ですが、ほかに適訳があったら教えて下さい。要するに登山、潜水、探検等々、野外活動に伴う医学的諸問題を論ずる学問分野です。

一体どんな学問内容なのか、それを今度の学会のプログラムから大雑把に拾ってみますと、

「旅行医学、特に途上国下痢症」、「高温環境医学」、「砂漠生存」、「山岳・雪崩遭難救助」、「スポーツ・クライマーの自己救助」、「高所医学(高所肺水腫、神経、呼吸循環…に関するの最近の進

歩等)」、「低体温」、「寒冷生存」、「溺水・河川・海洋遭難救助」、「潜水医学」、「海洋毒物学」、「遠征医学・その実際、隊員選考法」、「野生環境での傷の手当」、「宇宙医学」、「アマゾンにおける医学的植物」、「毒虫、毒蛇対策」、「対死対処法・救助心理学」等々。

特徴的なのは、以上、すべて実臨床的内容で、すべて明日とは言わず今日から「役に立つ」講演ばかりだったことです。

私は「ヒマラヤにおける酸素節約装置の実用性」と題して演題申し込みをしたところ、採用され、発表させてもらいましたが、これは純粹実地的な試みだったので取り上げられたものと思われました。

私が関係する日本登山医学研究会でも、このような実利的知識の披露、ということが常に発表者に求められているのですが、なかなか「アカデミック」な演題と発表形式から抜け出すことが難しい現状にあります。例えば「蝮に咬まれた時はどうするか」といったような研究の発表はありません。今後は我々もそういう狭いアカデ

ミズムから、そしてさらに、単なる登山医学、それも「高所」にこだわった狭い分野から抜け出して、もっと広く、自然環境全体に対応する実利的医学の普及、発展に努めるべきであることを痛感して帰って来ました。

この「野生医学学会」の本部はアメリカのカルフオルニア州にあり、また、この学会の機関誌は「Journal of Wilderness Medicine」という季刊誌としてロンドンから出ています。雑誌の読者層は一応医療関係者を想定していますが、一般登山家にも面白い論文が乗っています。本邦でもこのような広く実利的な医学分野に興味を持つ同好の士が大勢名乗り挙げて来られんことを期待します。詳しくは左記筆者まで。

(連絡先: 大阪府済生会泉尾病院、大阪市大正区北村三ー四一五、☎〇六一五五二一〇〇九二)

ヒマラヤ

気象・環境調査隊

第一次隊報告

東海支部 中世古隆司

今年正月の朝日新聞に、突然記事が出て驚かれた会員の方もおられると思いますが、この話は気象学者の吉川友章会員が、数年前より熱心に押すす

めていたもので、話が急拠具体化することになった次第である。

かくして、名古屋、東京、名古屋と三回の会合がもたれ、四月上旬来日中のネパール山岳協会(NMA)会長ボカレル氏も協力を約されたので、四月七日名古屋発のRNAのカトマンズ直行チャーターフライト便で急拠出発することが決った。

(今回の主な任務)

①今後の気象ロボット設置に関する事前調査および関係方面への協力依頼
②高度約三八五〇呎のホテル・エベレスト・ビューの屋上に気象観測機器の設置

③瀋岸の石油火災の影響調査

(隊員)

湯浅道男(隊長)、尾上昇(実行委員長)、久保隆昭、岸田洋、須藤悟(以上気象機器担当)、中世古隆司、恩田浩(以上調査班。雪の採取)

(行動概要)

四月七日 名古屋ーカトマンズ

四月八日 現地挨拶、夜NHK主催の歓迎レセプション

四月九日 十日 カトマンズでの準備、支部主催夕食会、夕食後湯浅、尾上の兩名は帰国

四月十一日 KTMーシヤンボチエ

四月十三ー十七日 調査班は、ゴークョに向い雪の採取(瀋岸影響調

査用)。気象機器班は観測機器および集塵器をビュー・ホテル屋上に設置、室内のコンピュータと連結および作動テスト

四月十八日 カトマンスへ戻り、四月二十一日名古屋へ帰着

採集した雪氷と川氷は分析中であるが、吉川氏によれば湾岸戦争の影響がヒマラヤ地域にも及んでいるとのこと。

なお、現在ヒマラヤ気象・環境調査実行委員会の事務所が、川崎市川崎区砂子二一八一、シャンポール川崎砂子六〇四号室 (Tel・FAX 044-246-5189) に開設され、中世古隆司が事務局長として常駐している。

北海道初夏山行

後方羊蹄山

北海道支部

千支のヘム^{ヘム}に因んで、羊蹄山に登ろうということが、支部役員会で決まったのは支部総会の数日前、なんとか山行計画をたてて、会員に周知できたが、参加締切り日までは数名の申し込みがあっただけで、あまりの不人気なのには驚くやらガッカリするやらであった。

六月二十二日予定通り羊蹄山麓の道

1990 年度資料受入報告 (1)

資料委員会

番号	品 名	受入月日	寄 贈 者	保管場所
	写真 1969 年 1 月 ヒラリー家で撮影 1 枚	90. 6. 19	中 村 テ ル	本 会
	複写本「祖母嶽」 1 冊	"	井 澤 信 久	図 書
120	色紙 アンナブルナ登頂 40 周年記念サイン入 1 枚	90. 7. 17	日 下 田 実	本 会
	写真ネガ (永久保存用) 60 セット	90. 9. 18	大 木 操	
268	門田ピッケル (横の焼印有り)	90.10.19	植 恒 治	スイス博
269	ピッケルの頭 (横) シェンク? (シャフト無)	"	"	大 町
270	" ピック曲り (")	"	"	"
651	靴 防寒内ボア付き ビブラム底	"	"	本 会
652	" 皮登山靴 キャラバン底	"	"	松 本
653	靴 鋏皮登山靴 (茶) アルバータ・ヤマザキ銘	"	"	大 町
654	" " (黒)	"	"	スイス博
655	" スキー靴 (皮底) 木型入り	"	"	大 町
656	" 皮キャラバン靴 フジクラ底	"	"	"
657	" 布製キャラバン靴	"	"	松 本
658	" 防寒編み上げ長靴 キャラバン底	"	"	大 町
659	シュラフザック (黄色) 羽毛製	"	"	"
660	ザック (黄色) ビニロン製	"	"	"
661	ヤッケ (カーキ色) "	"	"	松 本
662	マント (") "	"	"	大 町
663	オーバーズボン (") "	"	"	松 本
664 A	カッターシャツ (ネズミ色) 綿	"	"	"
" B	" (") "	"	"	大 町
665	" (") ウール	"	"	本 会
666	ニッカーズボン "	"	"	"
667	皮チョッキ	"	"	スイス博
668	帽子 ボア付き防寒帽	"	"	松 本
669	" 綿登山帽 (マナスル登山時使用の物)	"	"	本 会
670	" 日除け付き綿登山帽	"	"	大 町
671	" スキー帽 (黒) ウール	"	"	"
672	オーバー手袋 (カーキ色) 羽毛工業製	"	"	松 本
672	皮手袋 5 本指 (黒)	"	"	大 町
674	" 3 本指 (茶)	"	"	松 本

新羊蹄自然の家に集合し、夕食までに時間があつた。自然公園の羊蹄ふるさと館と森林学習展示館を見学し、さらに緑深い自然林に分け入って野田会員から樹木や草花の説明をうけて、いわゆる森林浴に親しんだ。

翌朝は前夜のお天気祭りの効果があつてか、雲も上がりはじめ午前七時三十分には真狩登山口を出発した。オホーツク高気圧に覆われていて北海道特有のひんやりした爽やかな風もあつて、快調に足を進める。途中三合目付近で当日出発組の小須田支部長以下四名が急ぎ足で追って来て合流する。途中で野田会員から咲き競っている高山植物の説明を受けながら高度を上げて行く。イワギキョウ、イワブクロ、ウメバチソウ、タカネニガナ、オダサムタンポポ、オノエリンドウ、メアカンキンバイ、エゾノツガザクラなどが咲き乱れとくにキバナシヤクナゲの大群生は見事だ。

午後〇時四十分には外輪に達したが一面厚い雲に覆われ十数分しか見えず、旧避難小屋跡まで行き雪渓の雪を取って来てウイスキーのシャーベット割りや凍り小豆を作って楽しむ。少しガレ場になった所で風を避けて温かい味噌汁を作って体を暖めて午後一時四十分下山開始する。

帰り道は清掃登山としてそれぞれ用

意してきたゴミ袋を出して登山路や周辺に目を向けて歩く。地元の山岳会が一週間前の山開きに清掃登山をしていたので、予想したよりゴミが少ない。午後五時無事全員下山する。集めたゴミの中にはウイスキーの空壺やビールの大壺もあったが、いずれもかなり古いものだった。頂上の展望はなかったが素晴らしい高山植物とゴミの少ない綺麗な山が保たれていて楽しい山行だった。

参加者 淡川舜平、大久保五郎、大久保節子、小須田喜夫、酒巻吟一、高澤光雄、野田四郎、水科行雄、横内泰美 (水科行雄)

・会務報告

七月定例理事会

七月十八日(木)十八時三十分

場所 本会会議室

出席者 山田会長、藤平、松田両副会長、小倉茂、重広、大倉、大森、入沢、小倉厚、穴田、石橋、片岡、南川、村井、神崎各理事、中島監事、橋本、西村、斎藤常任評議員
〔委任〕藤井、山口、関口、伊丹各理事、飯野監事、嶋原常任評議員

議事に先立ち明治大学チョモランマ登山隊平野隊長よりお礼の挨拶があつた。

た。

議事

(1)登山隊推薦状依頼の件

ヤツギルドーム南峰(電気大学二部山岳部)

(2)ナムチャバルワ募金の件

企業募金は理事会を挙げて取り組む。目標額は一億五十万円。

(3)ナムチャバルワ登山隊の準備状況

* 隊員の決定：木本 哲⁽³⁾、大西 宏⁽²⁸⁾、山本 篤⁽²⁸⁾、広瀬 学⁽²⁴⁾

* 報道隊は登山とは別の行動をとるが、報道と登山隊との間に入る報道マネージャーとして、三輪文一⁽⁴²⁾(読売)、片岡泰彦⁽³²⁾(NHK)が参加。

* マネジャー、ドクターは未定、九月出発までに決める。

* 梱包は先週から始めた。隊荷は八月中に中国隊に届ける。天津八月十五日着。

* 中国登山協会とのトレッキングの交渉を行っている。

(4)山岳研究所

* 先月二十八日に安曇村の有馬新村長と新助役に小倉茂、太田で挨拶。

* 自転車振興会申請書には県知事からの副申書をもらえるように赤羽支部長に依頼。

* 小川、溝口両氏に設計料を支払う件。

(5)HAT-J

* 昨日第三回シンポジウムを開催した。

た。

* 人手、資金、知恵不足を感じる。

* HATの募金は、仙台、福岡、富山、関西、名古屋等各地の協力も得て行っているが苦戦している。

* 会議の内容は登山以外では生態、文化、自然等を考えているが誰に依頼するかは未定。

(6)その他報告事項

* 笹川スポーツ財団に小倉、藤井が説明を聞きに行った。

* 責任者賠償保険の件。

* マッキンレー日記記録計のデータは十一月まで稼働していた。

* 「合同募金のお願い」二十日頃には発送したい。

* 苗場山「天下之霊観」の碑は修復が終わり、除幕式が行われる。

* 医学シンポジウムは盛会であった。入会承認者 開発秀三氏他二十八名。

合同募金常任委員会

八月六日 十八時三十分

場所 本会会議室

出席者 今西委員長、山田、藤平、小倉茂、飯野各副委員長、松田、中村、大塚、橋本、宮下、吉村、大森、村井、藤井、宇田川、片岡、大倉、伊丹、沢村、太田、山口、重広、小倉(重)、神崎、小川、平野(真)、鈴木、平野(隆)、石橋各常任委員

議事

ナムチャバルワ登山と山研改築のため
の資金の大きな柱となるのは会員募
金と企業募金であるが、会員募金に
ついては既に通知を出し、八月五日現在、
一四八名、五九一口、三、〇二一、一
九九九の応募がありスタートは順調で
ある。企業募金については体育協会寄
付金の免税措置を受け、それに基ずい
て経団連等との交渉を重ねてきたの
であるが、見通しは厳しいものがある。
そこで各常任委員がそれぞれの関係先
企業に積極的に出向いて応募をお願い
をすることにした。登山隊の出発も近
づいていることでもあり、直ぐにでも
行動を起こし、九月五日の常任委員会
までにはある程度の見通しを立てた
い。

なお、募金事務が多忙になることが
予想されるため、専従員を備う必要が
あるので、この人選を早急に進めるこ
ととする。

山研・ナムチャ合同募金応募状況

今般、山研改築とナムチャバルワ登
山のための合同募金を会員の皆様にお
願ひしたところ、早速多数の方々から
のご賛同を頂き大変有難うございま
した。

この二つの大きな事業が、皆様のご
期待通りの実を結ぶよう関係者一同力

を尽くします。ここに応募下さった
方々のご芳名(敬称略)を記しお礼にか
えさせていただきます。以後の応募者
についても逐次ご報告申し上げます。
(八月十日現在)

(一〇〇〇) 藤平正夫、(四〇〇) 明大
炬辺会、(二〇〇) 小倉茂暉、松田雄一、
赤羽孝一郎、(一〇〇) 竹田寛次、麻生
国雄、正橋剛二、鈴木雄二、高尾徳繁、
濱野吉生、大森弘一郎、小倉厚、田部
井淳子、平野真市、横山八郎、片山英
一、金井哲夫、村井龍一、橋真琴、藤
井正彦、(八〇) 中井修二、(六〇) 麦倉
啓、片岡博、奥谷潤之輔、遠田栄、増本
茂、大島輝夫、山下松司、尾崎徳郎、児
玉茂、中川武、久保孝一郎、高橋早苗、
村田省一、岩瀬秀郎、鹿野勝彦、鍋木
昇、柳下棟生、海野治郎、堀嘉余子、(五
〇) 奥山巖、(四〇) 継松久美男、出来
田耕介、関口敏、今村正二、秋山正人、
浅原健蔵、東浜義男、吉沢一郎、三井
嘉雄、塚原道夫、林田正幹、中村美津子、
藤井信己、吉田絃臣、木下是雄、北村
義男、井野千枝子、本多夏生、宮原利
重、山口節子、里見清子、(三〇) 小森
恵己子、早川栄二、村川八重子、千谷
壮之助、奥野正亥、渋谷昭市、甲斐良
治、長田義則、(二〇) 斉藤桂、佐藤行
彦、牧田洋子、菅野弘章、鈴木英一、竹
内孝、古市進、渡辺誠司、三枝礼子、
平野博志、須貝高善、見澤繁幸、高橋

聡、小野田三郎、丸茂キクエ、滝口操、
滝口脩、戸張隆、佐藤はまゑ、大須賀俊
彦、小林佐和子、小比類巻尚美、福楽勲、
奥村一郎、田尾正、橋本行雄、松本宏、
山口定男、渋谷千秋、平野武利、本城
淳子、常盤峻士、阪上秀太郎、目黒元
沢井増夫、皆川孝平、高田充克、東原
進、長島隆、雁部貞夫、山本俊雄、堀田
恵、松田章、石井貞吉、鈴木耕治、小田
和美、山口武夫、山本朋三郎、松井潤
次、近藤晋、寺村栄一、村木秀男、長坂
博、星野重、川又恒一、港叶、守田治夫、
前田武治、萩徹、伊藤祐道、土佐洋一、
池田知早、知久健四郎、高野啓介、富
田郁夫、井上信義、笠原宏、伊吹泰次
郎、阿部一孝、中野善壽、三島義彦、
黒沢和士雄、川俣俊一、石川治郎、清
野務、森信昭二、橋本正巳、金豊治郎、
荻野弘三郎、原田衛、竹田暉、坂口三
郎、三輪利雄、寺本正史、荒木正弘、秋
山知也、村木康義、日浦厚子、加藤節
子、柏倉信義、原善代志、浅井秩夫、
鈴木一弘、小林猛臣、小松寛、田中重
輔、山本淳、三原一男、戸谷翠、吉武
秀夫、田中三郎、綿引安人、渡辺照人、
藤野欣也、富山隆、山本光二、斉藤直
信、山口善弘、大倉寛、荒井謙之輔、

神保信雄、平岡茂樹、尾藤昭二、金田
貞男、池田昭二、岡野修、今井友之助、
山下嘉彦、山里寿男、野田憲一郎、高
田知典、中村靖弘、田中義晴、芽野忠
幸、山本幸生、奥淳一、清水国通、中
埜愛三、上田正、津川昌平、橋本誠二、
山田和男、中谷宝悦郎、大里祐一、芳
賀成明、小平禮明、松田要悦、浅野初
子、山崎大造、廣瀬吉彦、小椋凱夫、
宮原岳子、上尾庄一郎、重村傳平、堀
田典郷、中山健、大場浩正、小原達、岡
部正敏、五十嵐篤雄、野田尚志、岩瀬
浩、渡辺富士子、榊原隆彦、梶原昭子、
大野盛彦、近藤暉、平山暁子、石田國
男、継松義彰、市倉金蔵、中川喜久雄、
増子寛、和田誠一、谷正雄、室伏偉男、
細川沙多子、関孝治、西方昇、椿居澄
子、椿井義男、田中聡、田中弘美、熊
谷太三郎、天野晴彦、平戸孝夫、吉田
弥、金井五郎、上野和之、山岸猛男、
中野明、辻寅吉、柳沼シゲ子、中山重孝、
橋村一豊、望月重昭、保科文人、杉本
義信、田畑真一、吉永定雄、岡村治信、
藤原謙二、山本武志、坂本眞生、戸谷
忍、武田峯生、金森繁三郎、小野里英
次郎、三宅次郎、島海宣和、山本稔、
武井清、城島正幸、伊藤一之、佐藤藤

次代に残そう美しい山と溪

一郎(二口) 臼田毅弘、白木幹司、秋山征子、杉浦雄治、岡部品江、大久保昭次、大井正一、花井馨(越後)、塩入章夫、富田弘平、佐々木民秀、樋口格、中川和道、鶴木洋、上野川孝一、大谷直弘、清水芳彦、阿部喜久治、白井彰、和田マサコ、松本憲庚、坂西俊一(二・二口) 山口滋嗣(〇・六口) 林尻悟(〇・二口) 清水巖、以上の他に小原勝郎さんを忍ぶ会から五万七千九百十九円のご寄付がありました。(合計三〇〇名、一〇二九口、五百二十万二千百九十九円)

ルーム日誌

(7月)

- 2日 スケッチクラブ
- 4日 学生部壮行会
- 5日 集写真交換会
- 6日 図書管理委員会
- 8日 アルパインスキー
- 11日 ムステージアタ隊、自然保護委
- 12日 常務理事会
- 15日 フィルム委員会
- 16日 資料委員会
- 17日 三水会、山研委員会
- 18日 理事会
- 23日 自然保護委員会
- 25日 女性懇談会
- 30日 科学研究委員会

7月来室者484名

会員異動

7月

退会

小田正男(四一七二)
終身会員へ
川俣俊一(五〇〇七)
白石 茂(九四四四)

タンポチエ僧院再建協力

募金者(芳名)

一万円―本田卯太郎。
八月一日現在累計四四五名、累計金額五、九三二、二九八円



☎ 3234-6659

この電話で
お知らせ
しています

●ナムチャバルワ・山研

テレホンカード発売

ナムチャバルワ峰の写真と新しい山研の外観図をテレホンカードに作成しました。三枚一組三千円、限定千組です。希望者は直接事務局で求めるか、または左記により代金に簡易書留料を添えて郵便振替で申し込んで下さい(払込料はご負担下さい)。

口座名 ナムチャバルワ・山研テレカ
係

番号 東京七―七五一四九一
送料・書留料 一組三二二円、二組三二二円、三組四四二五円、五組五〇〇円

●「山を語る」講演会

K2を始め海外で活躍の相模工業高校教諭の広島三朗さんが、最近に『山が楽しくなる地形と地学』という本を出版されました。そこで今回はその本をテキストとしていろいろと面白い話を聞こうと思います。

左記によりご参集下さい。

日時 十月二十三日(水)午後六時三十分

場所 JACルーム集会室

会費 一〇〇〇円(教材費他)
集会委員会

●HAT-J国際シンポジウム

開催のお知らせ

かねてより、準備をすすめて来ましたが国際シンポジウムの開催要項が左記の様決定しました。ヒラリー卿、メスナー、ポニントンら二十名の海外からの招待者を交えての国際会議です。この機会を見逃すことなく振ってご参

加下さい。

(A) 11月9日(土) 12時〜17時記念講演会
(B) 11月10日(日) 9時〜17時シンポジウム

高所登山、トレッキング、山岳観光
▼会場 昭和女子大学人見記念講堂
東京都世田谷区太子堂一―七

(地下鉄、新玉川線三軒茶屋下車)
▼申込み方法 郵便局にある、郵便振替用紙の裏面の通信欄に、AかBまたはAとBの種類と必要枚数をお書き添えの上その金額をお振込み下さい。確認の上入場整理券をお送りします。なお、お問い合わせはHAT-J国際シンポジウム実行委員会事務局(☎〇三―三四〇一―四三五四、FAX〇三―三四〇一―六〇三四)へ

振替口座番号 東京六―四九四〇五
▼振替口座番号

口座名 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト
▼参加費 両日とも各一〇〇〇円
(HAT-J会員割引は一〇〇〇円)

●「秋を撮ろう」撮影会

フィルム・ビデオ委員会

(共催)

期日 十月二十七日(日) 日帰り
場所 山梨県 西沢溪谷

費用 交通費(専用バス) 保険料込み
会員：六千円、非会員：七千円

講師 羽田栄二フィルム・ビデオ委員長、他委員

申込み ハガキで「日本山岳会ファイル・ビデオ委員会」まで。

(会員番号・氏名・年齢を明記して下さい)

定員 五十五名(申込順・定員になり次第、締切ります)

申込み締切日 十月十日迄。参加者には詳細、お知らせします。

その他 小雨決行。この場合、現地休憩所で、撮影講習を行う予定です。

編集後記

◆本誌の各所に見られるように、ナムチャバルワ峰登山。上高地山研、H A T - J の国際シンポジウムと本会の今年の三大行事の本格的な準備に入りました。成功を祈るや切です。会員各位の一層のご協力をお願い致します。

◆しかし、清涼の秋山もまた佳し、大いに英気も養って下さい。(0)

平成三年九月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話 東京(326) 四四三三

振替口座 東京三―四八二九番

東京都港区赤坂一―三一六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂